

大飯・玄海原発の再稼働延期と神戸製鋼のデータ改ざん問題について

2017年11月30日、関電・九電より、衝撃的な内容が発表された。

2018年1月・3月に予定していた大飯原発3・4号機と玄海原発3・4号機の再稼働を約2ヶ月延期し、それぞれ3月・5月にすると。そして、その理由が、神戸製鋼所の製品データ改ざん問題を受けてであると、両社歩調をあわせて横並びでの発表があった。

とくに関電の場合、福井地裁での運転差止の判決（2014年5月）を不満とし控訴中であり高裁での判決は確定していないにも関わらず、11月27日、福井県の西川知事が「再稼働に同意する」と表明し、いよいよ再稼働強行かと危惧されていたその最中での発表であった。

実は、両社が歩調を合わせているのには理由がある。

関電の大飯原発3・4号機と九電の玄海原発3・4号機は、三菱重工が1991年から1997年にかけて製造した、ほぼ同設計の加圧水型軽水炉である（参考①）。このため、再稼働へ向けての審査も横並びで進めていたことから、2018年初旬の同時期に再稼働を予定していたと思われる。さらに、今回の神戸製鋼所によるデータ改ざん問題に対する説明・対応も、原子力規制委員会に対して横並びで進めようとしており、11月30日同日発表になったと推測される。

◆参考① 原発なくす蔵の【資料】に掲載「全国原発データ」より

http://npg.boj.go.jp/siryou/genpatu_list.pdf

但し、関電・九電が原子力規制委員会に対して、神戸製鋼所の製品が原発のどの箇所にもどのように使われているかを詳細に報告したのは、11月15日の第49回会議のようである。それまでは、電気事業連合会が代表して回答。規制委員会の更田委員長でさえ、「電事連クレジットの説明を求めたのが間違いだった。電事連に頼むと、丸めに丸めたものが出てくるのではないかと、今回はそう思い知らされました。」「何で後からぞろぞろ出てくるのだという感じは禁じ得ない。」「本件に関して言うと、各電力会社個々に、その社名をもって報告をしてもらわないと駄目だというのが教訓でありました。」（参考②の議事録 24 ページに掲載）などと言わしめるほど、“事実を隠したい、穏便にすませたい”電気事業連合会・電力会社各社と原子力規制委員会の間での攻防もあったようである。

さらに、関電は、福井県の西川知事が同意を表明するまでは、事態を明らかにしたくなかったのだろう。原子力規制委員会での議論が11月15日、西川知事の同意が11月27日、再稼働延期の発表が11月30日という時系列は、そうしたことを物語っているようにうかがえる。

◆参考② 原子力規制委員会第49回議事録（2017年11月15日開催）

<http://www.nsr.go.jp/data/000210053.pdf>

（19～25 ページで、神戸製鋼所のデータ改ざん問題についての議論が掲載されています）

では、神戸製鋼所が製造した部品は、大飯・玄海原発3・4号機のどこに、どのような製品が使われていたのだろうか？

詳細な内容は、議事録とともに明らかにされている「資料4」（参考③）を見て欲しい。原子力規制庁の名前で、11月15日付けで発表されている。議事録の中でも言及されてい

るものである。ここでは、その中の 17 ページ・19 ページにある「主要設備における神戸製鋼所等製品の使用状況」（参考④）に注目したい。前者が関電作成のもの、後者が九電作成のものである。

大飯 3・4 号機では、原子炉格納容器の鉄筋・テンドンに使用されている。同じく、玄海 3・4 号機でも鉄筋・テンドンに使用されている。

◆ 参考③ 原子力規制庁 2017 年 11 月 15 日「資料 4」

<http://www.nsr.go.jp/data/000209506.pdf>

◆ 参考④ 「資料 4」の 16～19 ページ

http://npg.boo.jp/topics/20171211katayama_siryoku.pdf

大飯 3・4 号機と玄海 3・4 号機は、同じ加圧式型軽水炉というだけでなく、同設計であり、建築費節減のためか、原子炉建屋が存在しない（参考⑤の玄海原発主要断面図を見ていただければ、構造がわかるかと思う）。原子炉建屋がない代わりに、大型ドームである原子炉格納容器（外気と接している最後の防護壁）を補強するために、従来の鉄鋼製ではなく、鉄鋼製よりも強い「プレストレスコンクリート製」（注）にしたという（参考⑥）。

（注）プレストレスコンクリート：

テンドン（ピアノ線のような引っ張りに強い鋼線）によってコンクリートに圧縮力のかかったコンクリート。鉄筋コンクリートよりも相当強いので、格納容器作りに採用された。

◆ 参考⑤ 原発なくす蔵の【資料】に掲載「玄海原発主要断面図」

http://npg.boo.jp/siryoku/genkai_danmenzu.pdf

◆ 参考⑥ 原発なくす蔵の【トピックス】に掲載

「玄海原発 3・4 号機に原子炉建屋がない“不思議”」

http://npg.boo.jp/topics/20170220katayama_nakanisi.htm

実は、その補強に使った、原子炉格納容器の壁に張り巡らされているテンドンに、30 数年前に建設したものはあるが、神戸製鋼所製のテンドンが使われているのである。

ことの重大性にお気づきだろうか。

この 4 つの原子炉の、何かあったときの最後の壁、最も重要な壁のなかに、テendonは張り巡らされているのである。しかも、他の部品と異なり、交換は不可能な場所なのである。

関電・九電は、「資料④」（参考③）の別な箇所（24・43 ページ）で、さらりと「異常は認められていない」と記載している。

しかし、神戸製鋼所による不正がいつまでさかのぼるものなのか、どの程度のものなのか等々、何も明らかになってはいない。仮に不正データをもとに異常がないかどうかを従来計算していたのであれば、これまで何もなかったことが“幸運”なことであり、“未来永劫異常がない”ことを保障するものではないことを、私たちは認識しておく必要がある。

ここは、神戸製鋼所も、各電力会社も正確な情報を、原子力規制委員会だけでなく市民に対して開示してほしい。また、異常が本当でないかどうかの審査は、厳正に行ってほしいし、私たちが監視の目を強めておく必要がある。市民側にたつ専門家の力がますます大切である。心して臨みたい。

なお、福島第一原発の汚染水を溜めている溶接タンクの多くで、神戸製鋼所の製品が使われていることも記しておきたい。

(文責 片山純子) 2017年12月11日公開